

【山田氏】

ただいまご紹介いただきました山田でございます。私の今日のお話は、入試とは少し異なりまして、教育面での高大接続というような視点でアメリカの **Advanced Placement** の話と、最近 **AP** が東アジア諸国で、特に中国・韓国で導入されるようになってきておりますので、そういうお話をさせていただきたいと思います。

すでに高大接続の議論の背景というのは、先ほど濱名先生と川嶋先生が大学、そして高校の立場、高校の側面で進んでいる議論についてお話ししてくれたと思います。しかし、どちらかというとはやはり今、高大接続部会にしても高校教育部会にしても、入試というところに焦点が当てられているのではないかという問題意識を私自身は持っております。そこで、たとえばもう少し教育課程あるいは教育制度という点から見た高大接続はどんなものがあるのかという点で考えてみた場合、学生確保という視点で見るとすでに日本でもオープンキャンパスや体験授業とか高校出張授業、関係する高校の系列化や連携校の増加とか、いろいろあるかと思います。また、高校から大学への移行という視点で見ると、入学前教育、e ラーニングの提供、そして先ほど小笠原先生からお話があった、大学に入学してからの学士課程教育を移行させていく、あるいは私どもが一所懸命の間ずっと行ってきました初年次教育などが、そういう範疇に入るかと思います。

しかし、実際に大学の教育課程を高校で学ぶというような視点は、意外に日本ではあまり議論されてこなかったと思います。そこで、私が今日ご紹介する **Advanced Placement** というのは、まさにアメリカで高校生を対象にした高大連携のプログラムということです。

実は今年の2月に文部科学省から委託調査を受けまして、私どもがこの **Advanced Placement** (以下、**AP** と省略) について調査いたしました。実は、私自身はもう25年以上前になるのですけれども、アメリカでこの **AP** を知ったときに驚いたといえますか、衝撃を受けたことがございます。なぜ衝撃を受けたかということ、当時受けていた大学院の授業の中でいわゆるシミュレーションで実際にどういう学生を入学させる

か、高校生のアドミッションを私は経験したことがあるのです。入試といいますか、SAT や ACT というものがあるのです。それから、そのテストの高校生の名前は全部外して持ってくるのですけれども、50 人ぐらいの中でどういう学生を選ぶかというのを実際にやってみるわけです。そうすると、SAT や ACT という点数の一覧が示されます。やはり私などは日本人ですから、どうしても入試の点数が「高い」、それから高校の GPA、成績に目がいくのです。しかし、アメリカ人の先生も含めてアメリカ人の大学院生たちからは、違う視点が出てまいります。そのときにあったのが、この AP だったのです。AP という科目を高校時代に受講しているかどうか。そしてその試験に合格して、どういう科目を単位として高校時代に取得しているかというような視点も、随分重要視されていることがわかりました。一体これは何なんだろうと思っておりまして、25 年以上前のことでもあります。

それから日本に戻ってきましても、なかなかこの AP というのが、知っている人は知っているのでしょうけれども、あまり話題にはなってこなかったと思います。そこで私はいろいろなところで K-16 という言葉をずっと使ってまいりましたけれども、K は Kindergarten です。幼稚園から大学までというような考え方で、そういう枠の中で教育接続を考えていくことが必要であると申しあげてきましたけれども、まさにこの AP というのは高校において大学と接続するというものであります。最近では AP は米国国内のみならず、国境を越えて普及していますが、一番広がりつつあるのが中国・韓国だろうと思います。

もう 1 つはコンカレント・プログラムです。これはアメリカで、個別の大学ではエクステンションプログラムで主に実施されております。あとで事例を出させていただきますけれども、これはある意味で日本の個別大学が実施する高大接続プログラムとも共通性があると思います。

では、この AP とは一体どんなものなのかというと、高校に在籍しながら大学レベルの授業を受講して、その授業を終了すれば大学レベルでの単位取得ができるプログラムであります。ただ、これは統一的に個別の大学が AP を行っているのではなくて、

カレッジボードが運営、いわゆる SAT などを作成しているところであり、カレッジボードが運営して、ETS で実施しています。ETS は、TOEFL などを経営しているところだ。この AP プログラムを受けて、そして試験に受ければ、その単位は大学入学後に卒業に要する単位として換算されるということだ。

AP プログラムは現在 24 か国の高校で利用されていて、科目と試験は 22 の学習分野から 34 科目と試験が提供されています。

もう 1 つ大事なのは、この高大接続に関しては、日本でいうと、たとえば私どもの大学などでは、学内校と呼ばれる同志社の系列の高校があります。ですから、大学の教師が、高校に受験しなくていい分、高校 3 年生ぐらいで少し時間が余っているところがありますので、心理学であるとか簿記や会計学といったような基礎を教えに行くこともしております。これはある意味、高大接続プログラムなのですけども、入学してそれを単位に互換するまでには至っておりません。ある意味キャリアというか進路を選択するときのいいプログラムになっているとは思いますが、しかし、これはあくまでも個別の大学で行っていることであって、その心理学科目が実際に大学に入ってからどの大学でも汎用性があるような内容であるかということ、そういうものではございません。そういうところが日本の高大接続プログラムの特徴になるかと思っておりますけれども、本来の AP はそうではありません。

いわゆる AP 科目は全国どこでも同じ科目ですから、ある意味でどの大学に行こうが、統一的な内容で行われていることになります。

これを教える教師は、実は高校の教師です。だから高校の教師がこのカレッジボードの支援を受けながら、大学で教える内容を教えるということだ、ある意味で教え方とか教授方法なども含めて接続があるということになるかと思っております。

AP プログラムの概要ですが、高校が AP コースを開設いたします。合格後、入学した大学の規定によって大学が単位認定することもある。これは大学によって随分違いがあるかと思っております。5 段階中 3 以上が合格であります。そして、先ほど申し上げたように、教育内容、授業方法が高大接続していることは、高校教師がこの授業を提供す

ることによってそれが可能になっているということになります。

では、高校生にとって AP 科目を履修するメリットは何でしょうか？中国ではたくさんさんの科目を履修高校生に取らせているようですが、アメリカの高校生はそんなにたくさん履修しません。いわゆる理系に進もうとする高校生であれば数学であるとか理科のサイエンスの基礎レベルであるとか、あるいは文系・社会科学系に進学する学生であれば、ライティングであるとかそういうような科目を取ったり、また何年か前まではカレッジボードの HP 上で試験内容まで見ることはできましたが、最近は見ることができなくなっています。日本語という科目もありました。その当時は、試験まで公開されていたので、私も見ることはできたのですが、やはり大学で教える内容というものは、高校生が履修するときその内容が日本みたいな知識レベルの内容ではないのです。応用的な内容で構成されているというような試験でありました。

ここで問題になってくるのが、日本でなぜ AP プログラムの実施が難しいのかという点です。1つの理由は米国では基礎的な大学の一般教育課程で学ぶものが、コアとしてできあがっているということになります。ですから、全国どこでも同じような内容で提供できるシステムとしてできあがっている。もう1つは、テストにも共通性があるということです。このあたりが多分日本では、先ほどの入試の問題で随分議論を重ねておられますけれども、これもまたこういう共通の AP テストということになったら、一体何年ぐらいかかるのだろうかという素朴な疑問を持ちます。高校生にとってのメリットは、早期から大学レベルの授業を履修することで、早期から大学での授業レベルに慣れることができる。作文技能を改善して、問題解決技能を修得することができる。高次の大学の授業内容に挑戦することで、大学での学習習慣が高校に在籍しながら修得することができるといったような点にあります。もちろん高校生にとってもメリットはありますけれども、大学にとってもメリットはあります。これはある意味で早期から大学志願をしている高校生であるかどうか、適性を確認できますし、だからこそ先ほどのシミュレーションの中で AP を履修していい成績で合格した学生を、たとえば候補者として上のほうにプールして入れるというのは、そういう適性把握に

も意味があるということになります。準備が整っているというようなことです。

それからもう1つは、やはりアメリカの大学は非常にア kreditation 団体や政府からリテンション率や卒業率をあげることを厳しく求められています。これはアカウンタビリティとしてです。そのときに、あまり退学をしないとか、留年しないというようにリスクのない学生を獲得することは、リテンション率とか卒業率を維持する、あるいはそれを上げるためにも重要な要素になりますので、そういうリスク管理の面からもメリットがあると考えているところだと思います。

そうは言いましても、AP プログラムは 1952 年から使われてきましたので、その間の大きな変化がございます。まず第一に、本来は、エリート教育の一類型だったので、本来優秀な生徒に早期から大学レベルの科目を履修させることで大学への適用を支援するというものでしたけれども、現在は大学進学を希望する学生が広くアクセスできるように、門戸を広げております。また対象学年を拡大して、従来は 12 年生ぐらいでしたけど、今では 9 年生から、日本でいうと中学 3 年になるかと思えます。12 年生が高校 3 年ですから、そのように早くから履修することもできるようになってきております。また、州によっては多様な高校生がたくさんいますので、そういうマイノリティである学生であるとか高校生であるとか、低所得の高校生を支援するプログラムとして、州自体がヘッド・スタートプログラムとして機能させている場合もあります。この場合は、州が補助をするというようなことも行っている。その典型的な例は、オレゴン州ですけれども、これはエリートのための AP プログラムという概念を打破することによって、高校から大学への進学率を上げるということを意図した政策でもあったということになります。

データ（スライド 12）から見ていただきますと、これは先ほどの委託調査の中の報告書をそのまま使っておりますけれども、2003 年から 2013 年にかけての AP 受験者の増加数が約 2 倍になっています。低所得家庭の AP 受験者数も非常に増加しています。それで、成績が良い高校生、5 スコアのうちの 3 スコア以上の AP 受験者数も増えているというような、好成绩結果者数も増加しているというデータも出されるようにな

ってきております。言い換えれば、一方で幅広い学生たちにもこの AP が使われるようになったと同時に、高校生でありながら成績の良い学生たちも増えてきているということにもなるかと思えます。

ただ、これは州によって差がございます。まず東部諸州とカリフォルニアでは、50%以上が受験します。南部諸州での受験率は低くて、これにはいろいろな意味があります。まず、入試の ACT が非常によく使われているということと、もう1つはやはり南部諸州は SAT にしても ACT にしても、全米の中で平均点が低くて、やはり大学進学の間格差というのが州によって違うのですけれども、南部諸州はやはりそのへんが低いために高校で AP を受けるということは、よっぽど支援しないと難しいということもあるかと思えます。

また、受験者の平均受験科目数が、1科目というのが55%です。そんなにたくさんの AP を取れるほど甘いものではないということもあるので、早くから単位を修得して、早期に大学を卒業するというものではないというように考えなければいけないと思えます。

しかし、AP には落とし穴がございます。どこまで高校教育であって、どこからが大学教育であるのかが不透明になる危険性もあります。特に AP の挑戦が低学年化になっておりますので、中等教育の意味が希薄化しているというようなこともあり、批判もされているようでございます。

もう1つは、この AP プログラムの意味は、大学教員と高校教員が連携できるということです。これは多分、高大接続特別部会に出られている濱名先生や川嶋先生が先ほどおっしゃっていたようにも思うのですけれども、非常に同床異夢とか、それからお互いになかなか協力しあうというのが難しいと思うのです。そのあたりが、たとえば日本の高校の教師と大学の教師というのは、協力をするとってもなかなか本当の意味での協力をしにくいというような構造があるのかもしれないです。ここで、この AP は両方が一緒に作らなければいけないので、そういう意味で教育目標や成果、あるいはその内容について、共有することができるというような利点もあるかと思えます。

また、高校教員の質が向上したりするということもあるかもしれません。

もう1つ、理系科目に関しては、先ほど小笠原先生が理系に特に焦点化して学士課程教育のことをお話ししてくださいましたが、やはり理系の場合は体系的ですから高校と大学でつながりは比較的あると思います。しかし文系・社会科学系の科目というのは、もちろんアメリカでは教育方法とかは、K-16 という枠組みの中でかなりつながりがありますけれども、それでもやはり高校と大学は違います。しかし理系科目だけではなくて、これは接続が可能です。それはあとでお話しするように、特に東アジア諸国の高校生にとっては意味を持っているものであります。

もう1つ、コンカレント・プログラムです。これは大学が提供している科目履修を前提として、条件を満たしていれば誰もがエクステンションを通じて履修して単位修得が可能になる。それが大学に入学しても単位が認められるということで、逆に言えば非常に早期から大学が高校生を確保するという青田買的な要素を持っているプログラムであります。このプログラムはどちらかというと、オープンアドミッションの大学のほうで実施されることが多くて、公共性が高い公立大学ではコンカレント・プログラムの機会は提供しますが、実際には AP プログラムを優先します。たとえば UC システムもコンカレント・プログラムを提供していますが、実際には入学のときにはこのコンカレント・プログラムを履修した学生を入れることはあまりしていないようです。

たとえば、コミュニティ・カレッジが開発したメインランド・カレッジなどは、2重単位の取得型コンカレント・プログラムでして、高校でも履修単位として認めて大学でも認めるというようなことをしております。なぜこういうところがこういうことに積極的かということ、まず費用の面です。やはりコミュニティ・カレッジに来る学生たちの層というのは、テキサス州の場合、低所得者層が多いわけですので、彼らに早くからエクステンションで履修したものを大学が認めることによって学費をたくさん納めなくていいというような意味を持っています。教育費負担の軽減につなげているということです。

2重単位取得型プログラムの高校生のメリットなどは、APとはかなり違うメリットが見えてまいります。

簡単にまとめますと、APプログラムとコンカレント・プログラムの違いは何か。AP科目を履修した場合、この試験に合格しなければ大学での単位を取得できません。コンカレントのほうは、科目を終了して単位を取得できれば、ただちに大学でも通用する単位としてその単位が認定されます。そして、AP科目を教えている教師は高校の教員ですけれども、こちらコンカレント・プログラムは、大学の教員が教える。そういう違いがございます。

こうしてみますと、アメリカの高大接続プログラムの評価と課題を見てみますと、まず評価点としては、早期から優秀な学生を入学させるための戦略として今でも機能している部分がある。コストをかけずにマイノリティなど高等教育の進学機会が少ない学生にとって、新たなヘッド・スタートプログラムとして機能している。知識基盤社会におけるラーニングアウトカムの目標を高校と大学が共有することで、成果の高大接続が可能になる。

ここにもっと初等教育とかが入ってきますと、まさにK-16で学習成果の目標というものを共有しながら、いわゆる授業方法なども共有していくことができるようになります。

課題は、先ほど申しあげたように、中等教育の空洞化です。つまり中等教育の真価が問われることもあるということです。

さて、スライド22についてですが、中国・韓国の高校におけるAPコースの導入が進展するようになってきております。もちろん数は限られておりますけれども、一部ではAP導入を図っている。このあたりは、日本と違って、非常に動きが早いです。また、そういう特例の高校などが普通の高校とは違う形で認定されていることとなります。

しかし、こういう高校は一体何を目指しているかということ、まずグローバル化という中で早期からアメリカの大学進学を目指す高校生を対象にしています。だから、も

もちろん費用は非常に高いです。しかし格差がありますので、日本のように一般的な家庭がこういう高校に送り込むということではなくて、中国では非常に所得の高い層がこういう高校に入れて、グローバル化した中でアメリカの大学進学を目指すということになります。

韓国はまた違います。やはり国内市場に限界がありますので、グローバル市場での就職を目指す潜在的な層が存在している。私は韓流が好きなのでよく見るのですが、女優さんや俳優さんをよく見ていると、アメリカとかカナダ、オーストラリア出身の人が多いです。だから、英語も上手です。どうしてこういう人たちが韓国で俳優になるのかというと、一定のそういうオーディションをアメリカ、カナダ、そしてオーストラリアに行って連れてくるのです。だから、そういう意味で言っても、いったん海外に出て向こうで学んでいても、そういう人たちが優遇されて戻ってきて、そういう市場に入るといっても可能になっています。そういう意味で言うと、韓国の場合、非常にグローバル化した市場を意識して子弟を送っているというような感じもします。

もう1つ大事なことですが、先ほど私は特に中国・韓国においてこの AP は社会科学系や文系に大事な意味を持つということを申しあげました。教育制度・教授法において、東アジア諸国の高校生は随分違う経験をしております。日本も昔はまさにそうでしたけれども、今は若干違ってきているかと思えます。やはり知識伝授型なのです。だから非常に受け身で学びますし、もちろんそれで覚えますから知識をたくさん習得しますので、一斉型のテストには強いのです。だからアメリカなんかでも、大学院の入学試験の GRE では、トップの点数を取るの中国人の学生が多いです。その中国人の学生はなんでこんな高い点数を取るのかというと、一斉に同じような問題を経験する予備校みたいなのがあって、またそれがテストで出たりすることもあるのですが、中国人留学生は、韓国人留学生もそうかもしれないですけど、そのテストの点で見ますと非常に合格する率が高くなります。しかし、入学してからが大変なケースも多くあります。それはどうしてかということ、やはりこのアクティブラーニングに慣れていな

い東アジア諸国の高校生、特に文系・社会科学系に入学した学生たちは、苦勞します。もちろん最初からアメリカに留学することを目指している学生たちにとっては、APを経験することは、大学に入学してからの適応につながるようになります。

ある意味で東アジアの留学生が誤解されがちな誠実性問題の回避、レポートや試験での剽窃問題など、これも結構大きいのです。誤解があるのですが、テストの回答をアジア系の学生たちは一所懸命勉強するので、教科書に書かれていることを書きます。これが剽窃だとなってしまうのです。このへんは、日本でもそうかもしれませんが、欧米諸国との概念の違いというものがここに現れています。ですから AP を学ぶことで、そうした剽窃の概念の違いを回避できることにもつながってくると思います。

さて、日本の高大接続プログラムも存在していて、たとえば埼玉大学の高大連携講座であったり、玉川大学と玉川大学高等部、桜美林大学なども行っています。これはどちらかというと、AP ではなくて米国におけるコンカレント・プログラムとか、韓国の UP というのがありますが、教育の高大接続プログラムと近い概念で構築されて運営されています。

スライド 25 では、塚原修一先生がまとめた報告書の中に書かれているものですが、AP と類似の事例です。「中国の AP 参加」というのは、まさに AP を中国で行っているものですが、韓国の類似制度というのはこの韓国大学教育協議会が行っている UP というようなプログラムであります。目的は、「AP」は入学前教育、「中国の AP 参加」は留学前教育、韓国も留学前教育になると思います。「韓国の類似制度」は、優秀な学生を確保する。「日本の類似制度」は個別大学で行われていて、入学前教育である。ここの特徴というのは、日本では個別で行われている。統一的にカレッジボードとか韓国大学教育協議会が行っているような形ではないというのが、日本の高大接続プログラムの特徴になるかと思います。

まとめてみますと、こうした日本でも個別大学で行われている高大接続プログラムはあるのですが、本当にこれを国内だけで完結させていくのかということも、

クエスチョンとして浮かびあがってまいります。たとえば、韓国や中国のようにグローバル化を意識して、海外大学進学を目指して AP を導入・展開するのかどうかということも、現時点では全く議論もされていませんし、わかりません。

大学が主体となるコンカレント・プログラム型高大接続プログラムを展開し、高校との連携を拡大していくのか。高大接続プログラムを教育の面でつまみ食いのいろいろなところで話はされますけども、実際にはどちらに向かうのか方向性が全く見えていないのが、日本の状況ではないかと思います。

言い換えれば、韓国でははっきりしていますので、留学を目指してアメリカの大学に行くような学生のために、そういう AP があるでしょうし、導入をする。国内の中で優秀学生を確保しようと思えば、UP をやっていけばいいということになるかと思いますが、日本の場合はそれさえもどちらに向かうのかが見えてこないというのが、私見でございます。

そういう意味では、入試という接続だけではなくて、教育面での高大接続ということもやはり考えていくべきところがあるのではないかと、最後に提示させていただきます。ありがとうございました。